

学園 双剣艶舞

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

小説 羽沢向一

挿絵 久水あるた

第一章	生徒会長対スケバン	006
第二章	放課後の継承者	027
第三章	調教化学実験室	058
第四章	生徒会室の乳辱	112
第五章	スケバン尻奉仕サークル	159
第六章	二年四組花奴隷オークション	203

登場人物紹介

Characters



しほうみかい 紫鳳美玲

白桜学園の生徒会長。聖剣克鬼鶴に選ばれた紫鳳流掃魔剣の継承者にして退魔剣士。

性格は品行方正で真面目。グラマーな体形で巨乳であることが自分では気に入らない。

つたもりなぎ 蔦守凧

白桜学園のスケバン。魔剣影女郎に選ばれた蔦守流排魔剣の継承者にして退魔剣士。

喧嘩っ早い性格のクールな吊り目美人。すらりとした長身とDカップのバストを誇る。

第六章 二年四組牝奴隷オークション

「美玲、最近つやつやしているわね」

突然そう言われて、美玲は返答に困ってしまった。美玲は今、白桜学園の体育館のステージの袖にいる。生徒会の役員たちとともに、ステージでの学園長のスピーチが終わるのを待っているところだ。今日は毎月の一日に、体育館で行われる学園集会だ。学園長の後に、生徒会長と役員たちによる様々な定例報告があった。

今話しかけたのは、生徒会会計の畑中恭子だ。一年生のときから美玲ともども生徒会に参加している友人で、学園でもっとも親しく言葉を交わすひとりだ。

「つやつやつつて、どういうことかしら？」

「美人なのは前からだけど、ここ数日でいきなり、女として艶めかしくなったというのかな。もしかして恋しているんじゃないの？」

「まさか。恋なんてしてないわ」

「そうなの？ 恋愛不感症の美玲も、ついに目覚めたかと喜んでいたのにな」

「そんなことあるわけないけど、もし好きな人ができたら、ちゃんと恭子に報告するわ」
「楽しみにしているからね」

恭子の期待にきらめく瞳をから、美玲は目をそらして、胸の内をつぶやいた。

(われながら女子高生らしい会話だわ。でも……)

自分が艶めかしさを身につけているとすれば、田中正良による調教の副産物だろう。化学実験室、生徒会室、屋上と三日つづけて陵辱されて、自分の身体が変化したと実感している。昨日はまともに動けるようになってから、凧と二人でプールのシャワー室で身体を洗い、念のために持ってきた服に着替えて帰った。

家でもう一度ゆつくりと入浴したときに、自分の身体が以前よりもむちむちしている気がしてならなかった。太ったわけではなく、肌が張りを増して、脂がのつてきているという感じだ。同じ印象を、シャワー室で見た凧の裸身に感じていた。互いに口に出さなかったが、凧も同じことを感じたに違いない。

(自分が、魔物に変えられている)

恭子の悪気のないおしゃべりで、あらためて自分が置かれている凄惨な状況を思い知らされ、無意識に首に触れた。指先に正体の知れない革と金属プレートの感触が伝わる。美玲が商品だと宣言する首輪は、今もしっかりとはまっていた。

(本当にこの首輪を、わたし自身の手ではずすことができるのかしら)

ついつい暗い思いに沈みながらも、美玲はステージへの注意は怠らなかった。学園長が言葉を締めくくり、ステージの反対側の袖へ歩いていく。生徒会の登場を告げる進行役の放送部員の女子の声か体育館に響いた。

「行くわよ」

と、ひと声、役員たちにかけて、美玲は先頭に立って歩いた。背後に副会長たちを並べて、ステージ中央に置かれた演台につくと、体育館にさっと視線を走らせる。

生徒会長として見慣れた全校生徒の列の中に、ひとつだけよく目立つ黒いセーラー服がある。蔦守風だ。あいかわらずのスケバンスタイルが、今は妙に安心感を与えてくれた。自分たちはまだ変わっていない、と思える。

だが異質なものも、目に入ってきた。整列する生徒たちの向こうに、見慣れない人影があった。体育館の奥の壁を背にして、十数人の大人の男が並んで立っている。教師ではないし、ときどき学園にやってくる教育委員会や父兄の代表でもない。

気になるが、生徒会長の義務がある。美玲は演台のマイクに話しかけようとした。

だが美玲の声よりも早く、別の声が館内のスピーカーから流れた。さっきの女子ではなく、男の声だ。

「それではあ、今から最後の商品チェックをしますよ。美玲さん。風さん。招待した顧客の皆様にも、お二人が特別な商品であるところを披露してあげてくださいねえ」

「正良！」

と、美玲が口にした名前は、生徒たちのざわつきに吞まれてかき消された。教師たちも顔を見合わせている。教頭が、誰のいたずらだ、とどなっているのが聞こえた。

少なくとも誰もができるいたずらではないことは、誰もがすぐに思い知った。体育館の高い天井をすり抜けて、異形の群れが出現したのだ。正良が使う魔物のなかでは、これま

で一番わかりやすい姿の怪物だった。鱗に被われた爬虫類の頭があり、手足のない芋虫じみた胴体があり、背中から二枚の蝙蝠の翼が広がっている。

顔つきや胴体の模様が違う以外は同じ造形の怪物たちが、金属を引っかいたような鳴き声をあげて、ステージへと降りてくる。魔物の狙いが自分だけなのを見て、美玲はとりあえず安堵した。

(だけど、わたしになにをさせるつもりなの？ 黙って魔物の餌食になれということ？)

疑問に答えるように、美玲の前の演台の木製の表面が泡立った。以前の化学実験室の床と同じに液化化した板の中から、鶴の首を模した刀の柄が垂直に浮かび上がってくる。一瞬わが目を疑ったが、体内に存在する〈武器〉との絆が、力強くなるのを感じた。

(本物のわたしの克鬼鶴、たわ！)

正良の意図を推測する余裕はなかった。克鬼鶴を自分の手で握る欲望に押されて、両手で柄をつかんだ。なんの抵抗もなく、白く輝く刀身を演台から引き抜く。熱く、まばゆい光が、体内に流れこみ、ふつふつと満ちる。美玲の身体が白光に包まれ、流麗な装甲が胸と肩と前腕に形作られた。

驚き騒ぐ生徒たちをかき分けて、黒い砲弾のように風がステージに跳び上がった。手には影女郎を持ち、セーラー服の上に禍々しい黒い装甲をまとっている。長い黒髪をなびかせるスケバンの顔には、一心同体の相棒をとりもどした喜色にあふれている。

「奴がなにをたくらんでいるのか、わからないが、やるしかないね」

「ええ。継承者であることが、全校生徒にばれるけど、しかたないわ」

凧がわずかに口の端をほころばせた。

「うれしそうだね、生徒会長」

美玲も上品な微笑を返した。

「あなたもね、鳶守」

「あたしたちは魔物を殺すことがなによりも好きな、ただの殺し屋さ」

凧の自嘲と誇りが混じった言葉に、美玲は反論しなかった。今は同意するしかない心持ちだ。

騒いでいた生徒たちも、固唾を飲んで生徒会長とスケパンを見守りはじめた。遊園地のヒーローショーにも見えるが、誰もが奇怪な化け物も二人が持つ異様な刀も本物だと本能で納得した。身につけた常識をすべて打ち消す真実の迫力が、生徒たちを圧倒する。

「死になさい！」

「喰われやがれ！」

克鬼鶴と影女郎が空を斬り、体育館の中を白い鶴の群れと闇の飛沫が、縦横無尽に飛翔する。たちまちトカゲ芋虫蝙蝠が次々と白い炎に燃やされ、黒い飛沫に喰いつくされていく。金屬的な悲鳴だけを残して、奇怪な姿が次々と消えた。

怪物の出現に驚いた生徒たちも、わけがわからないながら美玲と凧の活躍に目を見張り、熱い声をあげはじめた。

生徒たちの視線と声援を浴びて、美玲は克鬼鶴をふるいながら苦笑を浮かべる。

「今は喜ばれているけれど、この騒ぎが終わったら、みんな、どう思うかしらね」

凧もいつにない笑みで返した。

「前の継承者たちのように、あたしたちも旅に出るかな」

「そうね。いつかは来ることだったのだわ」

美玲も、凧も、〈武器〉の記憶を受けついでいる。歴代の継承者のほとんどが、家族を捨てて放浪の生涯を送っていた。やはり継承者に普通の生活は無理なのかもしれない。

飛行する魔物の大部分を消して、残り数匹になったとき、ステージの床からグロテスクな巨影が二体も出現した。それぞれ美玲と凧の目の前に立った魔物は、体形は熊に似ている。後ろ足で立ち上がった、高さ二メートルを超えるヒゲマだ。

ただし体毛がない。ヒゲマの全身から皮を剥いで、筋肉と血管を剥きだしにした凄惨な姿だ。見るからに痛々しいが、これが普通の姿なのだろう。

継承者たちは容赦なく刀で斬りつける。克鬼鶴の光る刀身が、怪物熊の脇腹にぶつかった。影女郎の闇色の切っ先が、筋肉が剥きだしの腹に突きたてられる。

だが、二人の手に予想外の感触が響いた。白い刃も、黒い切っ先も、怪物熊の赤黒い筋肉の表面で止まり、体内に入れない。触れるだけで魔物を殲滅できる〈武器〉が、魔物の表面でなんの力も發揮できないでいる。二人は同じ言葉を、目の前の現実につづけた。

「馬鹿な！」

正良も克鬼鶴と影女郎の刃を防いだが、あれは継承者の〈武器〉を使ったからだ。魔物の肉体が〈武器〉に耐えられるはずがない。美玲と凧はすばやく刀を引き、二度三度と連続して必殺の斬撃を放った。だが魔物の身体にはひと筋の傷すらつけられない。

「どうしてよ！」

「ありえない！」

「継承者はみんな、そう言いますからあ」

また正良の声が、体育館に響いた。不遜な笑い声が生徒たちのまわりを流れる。

「魔物の体液を飲まされるほどに、注入されるほどに、継承者は力を削られるんですよ。継承者の力が衰えれば、〈武器〉も威力を減らすんです。今のお二人は、雑魚の魔物は殺せても、ちょっと強い魔物には歯が立たなくなってますからねえ。それじゃあ生徒たちに、商品開発の結果を見せてあげてくださいねえ」

二匹の魔物熊がうなりをあげると、喉から後ろ足の間まで胴体が縦に裂けた。胸と腹が左右に割れて広がり、内臓があるべき胴体内から色とりどりの触手があふれ出る。

「このっ！」

「くそ野郎が！」

殺到する触手を相手に、美玲と凧は刀で何度も斬りつけるが、棍棒で殴るほどの効果もない。刃を叩きつけても、触手は衝撃を吸収して進んでくる。かつての化学実験室と同じく、二人の手足に強靱な触手の束が巻きついた。

「離せ、うあっ！」

「くうっ！」

両腕をねじられて、激痛の走る手から克鬼鶴と影女郎が離れてしまう。四日前とは異なり、ステージの床に落ちた刀が消えずに、そのまま自分たちの足もとに転がった。上半身に装着した装甲も消えない。二人は継承者の戦闘スタイルのまま、触手に手も足も封じられ、床から持ち上げられた。

正良のたくらみに、美玲は気づいて、息を呑んだ。

（全校生徒の前で、わたしと蔦守を辱めるつもりだわ！）

そう思い至って、必死に手足の触手を振りほどこうとしても、まったくの徒労に終わった。逆に両腕を頭上に掲げられ、両脚をMの文字に割り広げられる。

演台を挟んだとなりでは、触手に囚われた風も、美玲と同じポーズで大開脚を強制されていた。

二人のスカートも触手にまくり上げられて、全校生徒と教師たちの前でピンクのパンティと純白のスポーツショーツを公開させられた。ただ見られるだけでなく、ステージから体育館の全校生徒たちへ向かって股間を押し出される。

「みんな、逃げて！早く、逃げなさい！」

美玲はたまらず叫んだ。生徒の身を案じる以上に、下着を見られることを避けたかった。しかし体育館の壁にある四つの出入り口の前には、生き残った飛ぶ魔物が陣取り、爬虫類



の頭が鋭い牙を剥いて、誰も近寄らせない。

女生徒たちはほとんど顔を伏せて、下着の開陳を強いられる美玲と凧を見ようとしない。しかし男子は、異常な状況にあっても本能には逆らえず、ステージの淫虐劇に目を向けてしまう。学園随一の美貌とプロポーションを誇る生徒会長紫鳳美玲と、恐れられてはいても誰もが認める魅力にあふれたスケバン 蔦守凧の、下着と生脚を見られる機会に抵抗できる男はいない。

二人の美女が、醜怪なモンスターから伸びる不気味な触手に手足を縛られて、あられもない露出を演じさせられる姿は、あまりに扇情的で淫猥な光景だ。身にまとう不思議な装甲すら、女体を妖しく飾る特別なボンデーファッションに見える。異様な事態の連続に痺れた男たちのなかで、恐怖心以上に性欲が大きくなっていく。

生徒たちの淫熱のこもった視線に応じて、触手が美玲の胸の装甲を打った。今まで魔物に対して無敵の防御力を誇っていた白い鎧が、薄いガラス細工のごとく粉々に碎ける。両肩と前腕の装甲を残して、胸の防具が失われた。

先端が指のように枝わかれした触手が、ブレザーとブラウスのボタンをはずし、ピンク色のフリルつきのブラジャーをさらけださせた。最後の胸の防壁も、いとも簡単に触手にむしり取られてしまう。

三百対以上の目の前に、白い豊乳がまろび出た。

生徒たちからどつと声があがり、体育館の温度が上昇した。パンティを露出させられた

ときにはまだ生徒たちの顔にあった恐怖の色が、今やほとんど消えて、興奮で瞳をぎらつかせている。

美玲は大きすぎる羞恥に喉がふさがり、悲鳴をあげることすらできなかった。ただ口をパクパクと開閉させて、全身を硬直させるだけだ。

視界の端には、風の裸の乳房が入った。美玲と同じく肩と腕を残して胸の装甲を破壊され、四日前と同じくセーラー服を縦に裂かれ、スポーツブラをむしり取られている。風もまた声を出さないでいた。精悍な美貌を燃え盛る羞恥心に引きつらせて、閉じた唇の端を小刻みに震わせるばかりだ。

ほとんどの男子が、女の裸の胸を生で見るのははじめてだろう。先を争ってステージに押し寄せ、渋谷や銀座で突然スターのライブが開始されたような状態だ。さすがに巨大な魔物がいるステージに上ろうという勇者は出ていないが、生徒たちの昂った目つきはまともではない。

恥辱に身を焼かれながらも、美玲は異変を感じとった。

（いくらなんでも、みんな夢中になりすぎているわ。正良が恐怖を忘れさせて、性欲をつのらせるなにかを撒いたのかもしれない）

皆が異常な状態にあると考えても、恥ずかしさが解消されるわけではない。ついステージにかぶりつく生徒たちに罵声をぶつけそうになるのを、美玲は歯を食いしばってこらえた。鷹史や久賀たちとは違う。魔物の悪意に巻きこまれただけの自分の学園の生徒を罵倒

するなど、美玲のプライドが許さない。

凧も久賀たちに嘯みついていたのとは対照的に、自分を抑えた表情で、沈黙を貫いている。

しかし新たな二本の触手が胸に吸いついた瞬間に、凧の沈黙は破れた。

「ひっ！」

と、短い悲鳴が洩れてしまう。Dカップの左右の乳房に、赤黒い肉の触手が同時に襲いかかり、先端のお椀状の部分にすっぽりと被いかぶさった。お椀部分は透明で、触手に被われても二つの乳房はステージ下の生徒たちに見られつづける。

全校生徒の視線を浴びるなかで、凧の乳房が透明触手に吸い上げられた。胸全体の皮膚が透明な吸盤の内側に完全に密着して、形が歪む。乳首は吸盤触手の中心に吸いこまれて、引き伸ばされてしまう。人間の手では不可能な異様な刺激が、胸全体をチリチリと疼かせた。

「くっ、う、うう……ああっ！」

触手が動き出した。乳房全体にびっちりと貼りついた吸盤が不規則に波打ち、乳肉をうねうねと揉みたてる。吸引される乳首も、触手の繊細な蠕動によってしごかれた。生徒たちから見れば、乳房がひとりで蠢き、いやらしく形を変えつづけているように映る。

「あっ、やあ、あああんっ！」

凧は懸命に反応を見せないようにしているが、無駄な努力でしかなかった。もともと羞

恥に炙られていた顔がいよいよ赤みを増し、スケバンの精悍な顔の下から愉悦の表情が浮き上がってきている。顔そのものが右に左に揺れ、揉みくちやにされる胸に共鳴するようにM字開脚の腰が前後に躍りはじめた。

誰の目にも、風が怪物に胸を刺られて、女の快感を味わっているのはあきらかだ。生徒たちは、あの鳶守風がよがっていると驚き、言い交わし合い、いっそう欲情の色を濃くする。

ひとりひとりの声は小さくても、言葉は集まって、体育館に充満する大きなうなりとなり、風に襲いかかってくる。

（あああ、みんなが、あたしが悶えているところを見ている。あたしが感じていると言っている。あああ、だめだ。こらえろ！ こらえろんだ！）

大勢の目の前で恥態をさらす恐怖に、背筋が凍りかけた。しかしすぐに奇怪な愛撫によって胸から搾りだされる快楽の熱で、解凍されてしまう。止めようとする声はどんどん大きくなり、身体のうちねりは制御できなくなっていく。

（こんなに、こんなに、あたしの身体が弱くなっているなんて！ たった三日で、これほどいやらしくなっているなんて！）

風の声に出せない苦悩を、美玲は鋭敏に感じとった。美玲の目の前にも、透明な吸盤を持つ二本の触手が迫ってきたのだ。これから起こる淫猥な光景を期待して、生徒たちから猥雑なうなりがあがってくる。魔物に性欲を操られているとわかっているにもかかわらず、群衆が発す

るパワーの恐ろしさに耳をふさぎたい。

(わたしの胸は、きつと蔦守よりも敏感だわ。触手に吸いつかれたらどうなってしまおうのか……)

不安に苛まれる美玲の胸にも、ついに吸盤が貼りついた。

「あひいっ！」

全校生徒の羨望の的である美豊乳が吸いたてられ、紡錘形に引き伸ばされる。風以上に乳首が長くなり、今にもちぎれそうだ。見るからに凄惨な光景でありながら、同時に男子生徒たちの暗い欲望をかきたてる淫靡な姿だ。

美玲自身があげる艶めかしい喘ぎ声と、紅潮して蕩けた美貌が、生徒たちの淫らな想像をそそる。

「あああ、くうっんん、はううん……」

(だめ！ 気持ちいい。ただ、いじられているだけで、こんなに気持ちいいなんて)

魔物の触手は、昨日までのような媚薬効果を持つ体液を分泌していない。ただぬるぬるしているだけで、強烈な疼きを呼び起こし、官能の感度を倍加する効果はない。乳房のサイズも、吸盤に吸われて変形しているが、大きくなってはいなかった。

それなのに、目の前で透明な触手にいいように玩弄される胸からは、どくどくと快感があふれて、全身を蝕んでくる。その意味するものが、美玲の心をひどくかきむしった。

(わたしの身体は、おそろしいほどいやらしくなっている……)

それを思い知らせるために、正良は媚液を使わないのだろう。生徒たちの前で、自分の肉体が確実に牝奴隷として開発されていることを痛感させたいのだ。それがわかっても、美玲にはどうにもできない。胸を犯す触手を止められず、押し寄せてくる快楽が意識を混濁させていく。

そして新たな触手が、美玲のM字開脚の下半身に迫った。ねじくれた枯れ枝じみた突起が指のように並んだ触手が、パンティの両サイドをつかんだ。情欲の熱に浮かされて騒いでいた生徒たちが、途端に鎮まり、体育館全体が息を凝らしたようになる。

なにをされるのか、美玲にはわかりきっていた。凝視する生徒たちも理解していた。パンティの左右が引きちぎられて、いとも簡単に、ごく当然の自然現象のように、美玲の身体から取り去られた。

「んっ……」

と、美玲は息をつまらせ、声を出せなかった。

ステージの下からは、火山の噴火のように声が轟く。はじめて目にする女の秘密を前にした生徒たちの口から、次々に意味不明の音声が上がる。そのひとつひとつが、美玲のさげだされた花園に突き刺さった。

「見ないでっ！」

たまらず、叫んでしまった。こらえようと意識する前に、声が出てしまった。

それは風も同じだ。美玲のパンティが奪われたのにつづいて、触手の鉤爪でスポーツシ

ヨーツを引き裂かれる。まくり上げられたセーラー服のロングスカートの中を、全校生徒と教師に公開されると、スケパンも燃え盛る羞恥心に全身をわななかせて、引きつった声音で叫んでしまう。

「見るな！ みんな、見るなあっ！」

生徒たちの目は二人の肉体の一点に集中する。しかし大勢の瞳に映るのは、ぴっちりと閉ざしたままの恥丘でしかなかった。本当の秘密の扉は、まだ開いてはいない。

その中を見たいという無言の圧力が、美玲と凧に大津波のように押し寄せる。

生徒たちの熱望に応えるように、下着を乱暴に引き裂いた二本の触手の禍々しい指が、美玲の恥丘のふくらみに左右から触れた。鋭い指先が、本来人目に触れることのないやわらかい肉唇をわずかにくぼませる。ついさっきの強引な動きから一転して、繊細な指さばきで秘密の肉花を左右に開いた。

ステージの天井から照らされるライトの光の中に、生きた宝石がきらめいた。ほとんど生徒が、男子も女子も、生まれてはじめて見る女体の神秘だ。幾重にも重なった精妙な粘膜の襞が、透明な体液に濡れてキラキラと輝き、同じ年代の男女の心を鷲つかみにする。「ううっ！」

また、美玲は苦鳴を洩らした。豊満な美乳を執拗に揉まれ、乳首を激しくしごかれて、快感は止めどなくやってくる。それでもよがり声ではなく、苦悩の声があふれた。

耳に新たななどよめきが聞こえる。いくつもの言葉が重なって、具体的になにを言われて

いるのか、わからないのが唯一の救いだ。

渦まく声はさらに大きく、激しくなった。またも美玲につづいて、凧の秘唇も広げられた。美玲とは微妙に異なる秘花が、熱気あふれる観客たちに差し出される。

凧の顔が引きつり、言葉にならない声が口からあふれた。

「あっ、あああ、うう……」

次の恥辱は、凧を選んだ。新たな、そして今まで体験したなかでもっとも異様な触手が、大きく開かされた股間をくぐって、姿を現した。

視界に入った触手に気づいて、凧はまたうめき声をあげる。まるで自身の下半身から生えたようにも見えるモノは、久賀将と同等の大きなペニスの形をしていた。色は、料理に使うイカ墨を凝り固めたような黒だ。しかも普通の男根とは異なり、表面に丸いイボがびっしりと並んでいる。触手の目的は明白だ。

（あんなものを、挿入されたら……あたしはどうなってしまうんだ）

考えるだけでも恐ろしいことが、すぐに現実となった。黒いイボつき肉棒は、威容をステージ下の観客に見せつけるように、凧の開かれた股間の下で何度か揺れると、目標へ向かって上昇をはじめた。

凧も、美玲も、全校生徒も、醜怪な魔物の勃起が、女性器を狙っていると考えていた。だが黒ペニスはわずかに軌道をそらす。呼応して、凧の手足を緊縛する触手の束が蠢き、開いた下半身の角度が上がった。

広げられたままの濡花の下にひっそりと息づく肉のすばまりが、はつきりと生徒たちに差し出される。

風の耳に、肛門や尻の穴という聞きたくない単語が、次々と押しこまれた。

（見られてる！ あたしの尻の穴まで、みんなに見つめられてる！ あああ、みんなの前で、そんな！）

黒い亀頭が、あらわな肛門に押しつけられた。

「ひいっ！」

たまらず風は悲鳴を発して、股間を前へはね上げてしまう。

いっそう観客に見やすくなった肛門が、亀頭に押し開かれた。小さなすばまりが何倍にも広げられ、女の尻の中へ黒い男根触手がみちみちと侵入していく。生まれてはじめて目にするアナルの陵辱に声を失った生徒たちの耳に、風の声が響いた。

「ああおうっ！ おおお！ はおおうんんん！」

あまりに激しく、せつせつとした声だ。聞き間違いようもなく、快感を訴える声だった。生徒たちの驚愕は最高潮に達した。名前を聞くだけで不良生徒どころか暴走族にやぐざまで震えると噂されるスケバン風が、肛門を貫かれて歓喜の声をほとばしらせているのだ。胸を揉まれて感じるのとはわかるが、尻の穴をえぐられて感じるなど、若い生徒たちにはどうしようもない性倒錯としか映らない。

風もはつきりと気づいた。生徒たちの自分を見る目の色が変化したことに。欲望の色に、

あからさまな侮蔑が混じっている。沸き立つ声の渦のなかから、異常や変態という単語が聞こえた。幻滅とも言われている。

「違う！」

凧は必死に叫んだ。少しでも弁明しなくてはならぬ。

「これは違う！ あたしは、あつひいいっ！」

懸命の言葉も、尻の中で勃起が前後するだけで、よがり声に変貌した。太い魔物ペニス動く、表面のイボイボが肛門を次々と打ち鳴らし、腸粘膜をかき乱される。人間の肉体では不可能な異界の悦楽に痺れて、尻そのものがキュウキュウとよがり声を発しているようだ。昨日とは違い、媚粘液を注入されていない。自分自身の尻の官能が、凧を恥辱の地獄に落としている。

（昨日だけで、お尻がこんなに感じるようになってるなんて、ああっ、だめっ！ 奥で動かれたら！）

「ほおおうっ！ はっひいいい、ああああんっ！」

絶え間ないよがり声を噴きあげながら、凧は生徒たちへ見せつけるかのように腰を振りたくる。身体全体がピンクに染まり、触手を呑みこんだ肛門のすぐ上では、肉襞をきらめかせる体液が増量している。昨日の屋上での調教を知らない者の目には、アナル陵辱に感じまくる変質者しか映らない。

「ひいっ、だめ！ ここではだめえっ！」

自分がたやすく絶頂に進んでいると、風は知った。

（お尻でイクところを見られる！ そんなこと、死んだほうがましだ！）

だがもう止められない。自分の身体を自分で制御できなくなり、確実な破滅へと突進している。

美玲が首を曲げて、声をかけてくる。

「風、だめよ！」

それと同時に。風が絶頂の叫びを吐いたのは。

「いっ、いやああああっ！ イクっ！ おおおお、イッチャウウウウっ!!」

スケバンの全身が激しく硬直しては、すぐに緩んだ。尻に潜りこんだ黒い触手が前後するたびに、エクスタシーの汗にまみれた裸体が硬直と弛緩をくりかえし、口から何度もイクと声があふれた。

風が絶頂に達したことは、少しでも知識のある生徒の目には明白だった。いや、知識がなくても、本能で風がとんでもない状態に至ったことがわかる。女性器ではなく肛門だけを犯されて快楽の頂点を極めてしまうスケバンの姿が、トラウマにも近い衝撃をとまなくて生徒たちに刻まれてしまう。

風の異常な絶頂の叫びのすぐ後に、体育館に美玲の新たな絶叫が轟いた。スケバンが果てるさまを見ているしかなかった生徒会長の肛門に、同様の黒いイボつき剛棒が一気に侵攻したのだ。風と違って、美玲は尻の開発をされていない。それなのに、あるはずの痛み

がなかった。それどころかはじめての肛姦に、あからさまな快感が生まれている。

「う、うそ。こんなことって、はああ」

否定しようとしても否定できない肛門と腸を嬲られる愉悅が、美玲を困惑させる。胸や女性器に魔物の体液を注がれたために、今まで一度も触れられなかった尻の内部まで、淫らな性感帯に改造されてしまったと思うと、暗い絶望に襲われた。

二度目の処女強奪だけでは飽き足らず、もう一本の黒いペニスが、美玲の股間の下をくぐって出現した。やはりびっしりとイボに被われた男根触手が、前触れなしに膣へと突入してくる。

「ひぐううっ！」

美玲の全身がぶるつと震え、触手を歓迎するように前後に動いた。いや、実際に美玲の意志を離れて、膣壁は積極的に蠕動して、触手を奥へといざなっている。肉棒に並ぶ突起に性感のスポットを次々とつつかれ、今までにない苛烈な快感が湧きあがり、さらに粘膜の蠢動が活発になる。

「ああっ、はああん、あひいひいっ！」

膣からもたらされる喜悅が、尻の快楽と共鳴して、大きくなっていく。犯されることを悦んで、前後二本の黒い触手を呑んだ白い下半身が、ますます強く前へ突出した。

体内で触手が蠢くたびに肉悦の大波に呑まれる美玲の耳に、生徒たちが語る血という言葉が何度も入ってきた。その意味に気づいて、愕然とさせられる。

(知られた！ みんなに処女ではないことを、知られてしまったわ！)

同じ魔物に、処女も奪われてしまった、と弁明したい。しかし信じてもらえない。今の状態でなにを言っても無駄だ。あきらめが肉体を蝕み、抵抗する意志を打ち崩していく。

「美玲、しっかりしろ！ 意志を捨てるな！」

風の厳しい声が、美玲の耳に響いた。顔を向けると、風の汗に濡れた美貌が、にらみつけてくる。肛門絶頂を味わわせられながら、なお鋭さを失わない瞳に毅然とした輝きをたたえている。

「あたしたちが、みんなを守らなくちゃいけない、はっとううう！」

風の広げられたままの花園に、新たな黒い剛棒が突入してきた。美玲を叱咤していた声が、一転して絶望的な嬌声に変わる。美玲をにらむ瞳が焦点を失い、虚空をさまよう。

「ひいっ、あひっ、くおおうううっ！」

言葉を失った喉から、熱に爛れたよがり声が噴き出す。薄い粘膜を挟んだ二本の触手が前後し、うねり、のたうつたびに、膣と腸が肉悦の共鳴を起こし、恐ろしい勢いで快感が高まっていった。吸盤に吸われ、揉みしだかれる左右の乳房の喜びも加わって、風の全身を絶頂へ向かう巨大な竜巻に変える。

美玲の身体も、もはや公開陵辱される悦楽に溺れきっている。膣と肛門が触手を噛みしめ、粘膜がイボイボのひとつひとつにみっちりしゃぶりついている。吸盤に罅られる豊

乳から搾りだされる快楽の量は、風のDカップよりも何倍も大きい。

「お、おああああ、ひいひいっ！ いやあ、いやああああああんっ！」

「ひいっ、だめっ！ あふうううっ！ だめだああおとおおっ！」

二本の黒触手を吞まされた美玲と風の腰のうねりが、いつの間にか同調して、ダンスのふりつけのように同じ動きをくりかえした。そろって腰を突き上げて、生徒たちが凝視する前で、愛液と腸液を触手のまわりから滴らせる。リズムも同じに二度、三度と尻を左右に振り、ステージの床に透명한快楽の水滴をばらまいた。

よがり声は美しく淫猥なデュエットとなり、体育館中の人間の性欲をかきたてた。白桜学園を代表する二大美女のいやらしすぎるハーモニーに釣られて、生徒たちの歓声やうめき声や喘ぎが大きく高くなっていく。男子も女子も、男性教師も女性教師も、無意識のうちにパンツやスカートの股間を手で押さえて、身体を揺らし、足を踏み鳴らしていた。

体育館に響く欲情の大合唱がピークを迎え、たくさんの窓ガラスをピリピリと振動させたとき、リードをしていた美玲と風は限界に到達した。

「あああああっイクっ！ あっひひひひひひひひ！ イクイクイクイクううううううっ！！」

「おとおおおおイッちゃうっ！ イク！ ほうおおおおおおおおおっ！ イクううううううっ！！」

全校生徒の興奮に激しく共鳴して、美玲と風の肉体は、新たな官能の部位を覚醒させた。

二人の継承者の体内で、尿道がかつてないほど大きく開放される。気づかないうちに膀胱にたっぷりと溜まっていた小水が、男の射精さながらに奔流となって、狭い出口へ突進する。

絶頂の高みに昇った肉体に走る新たな快感が、尿意だと気づいて、美玲と凧は悲鳴をあげた。

「だめ！ みんなの前で、そんなことできない！」

「止まれ！ 止まってえっ！ いやだあっ！」

凄絶なエクスタシーの極みに弛緩した肉体は、二人の意志にまったく応えなかった。逆に尿道を刺激される悦びに盛大な喜声をあげている。

「いやあ、出るうっ！ はっああああああん!!」

「だめっ、漏れるう！ あおおおおおおおう!!」

絶頂の第二のピークとともに、美玲と凧は完全にタイミングを合わせて透明な小便の飛沫をステージから飛ばし、下につめよった生徒たちに降り注がせた。

怪しいクラブのダンスパーティーのように、男子も女子も美女のおしっこまみれになりながら歓声を叫び、両手を振りまわし、足踏みを轟かせる。

「あああ、いやあ……わたしのおしっこを浴びないでえ……」

「やめろ、ううう、やめてくれ、おおお……」

不意に美玲と凧を拘束し、囮っている触手の群れが縮んだ。驚く間もなく、触手に引つ



ばられた二人の身体が、背後の魔物熊の開いた胴体の中に吸いこまれる。

われに返った生徒たちの前で、生徒会長とスケパンを呑んだ二頭の怪物の胴体が閉じた。美しい裸身は、完全に姿を消された。

二体の魔物熊は真紅に血走った眼球を体育館の中にめぐらせて、雷鳴のように咆哮した。生徒たち全員が鼓膜の痺れる耳を押さえ、悲鳴を上げてステージの前から逃げる姿をながめて、魔物の巨体が床板を通り抜けて沈んでいった。

体育館の出口をふさいでいた蝙蝠の翼の魔物も、すばやく羽ばたき、天井に消えた。残されたのは、ただ呆然とする大勢の人間たちだけだ。

*

美玲と凧は教壇の上に投げだされた。

どうやって体育館のステージから移動したのかはわからない。魔物熊の姿はなく、自由になった二人は、全裸だった。正確には、両肩と左右の前腕を覆う白い装甲、そして首輪だけを残して、ブレザーとスカートも、セーラー服も、上履きとソックスもなくなっている。今まで散々陵辱をされてきたが、着衣を完全に脱がされたのははじめてのことだ。

顔を上げると、美玲にとって一番見慣れた光景がある。美玲が所属する白桜学園二年四組の教室だ。整然と並ぶ机と椅子のあちこちに、十五人の男が座っていた。青年で通る若々しい男から白髪の老人まで、威厳と貫禄たっぷりの大物風から不健康でさえない肥満体まで、年齢も容姿も様々だが、統一されている特徴があった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>